

## 抱返り溪谷で見た紅葉の三つの原色

宇敷 辰男

秋田県の角館からJR田沢湖線に乗って二駅目の神代駅じんだいで降り、ここから歩くと三十分で「抱返り溪谷」たきかえりに着く。ここはサクラやカエデ、ブナやモミジに囲まれた新緑と紅葉の名所である。田沢湖の水が流れこみ角館へ続く玉川の中流の、全長十<sup>キ</sup>程の溪谷である。かつては狭い山道でお互い抱き合わないとすれ違えないほど険しかったのがその名の由来である。

二十年前の十一月ここを訪ね、朝八時過ぎ、危なげないハイキングコースを歩き始めた。溪谷は深く、流れは緩やかである。静かな水面に朝日をうけた山の紅葉が逆さに映り、モミジ色が谷間をうめていた。

谷に迫り出した紅葉の間から眺めると、対岸の南斜面は落葉が進んでいて、木立が木ワつと優しい山肌を創りだしていた。薄茶色の枯れかかった落ち葉を踏みしめてゆくと、黄色がかかった橙色の新しい落ち葉もあった。視線を木立に移すと、緑の混じった赤い橙色や、明るい黄色がかかった緑の葉もあった。紅色に染まった橙色や、深く赤い橙色に染まった葉が陽を浴びていた。

「抱返り溪谷」の流れはコバルトブルーに見える。溪谷の上流にある玉川温泉からエー・エーの強酸性泉が流れ込み、アルミニウム成分が青い光を散乱させ、それが水底の白い岩に反射して光彩を放つそうだ。

青々とした緑の溪流、原生林の緑、晴れ渡った青空に囲まれた溪谷を歩いてゆくと、明るい橙色、透けるような黄色、真紅に染まった紅葉が風景を彩っていた。紅葉の「真紅」「黄色」「橙色」の三つの原色が織り成す色彩が、青と緑の中に際立っていた。

朝の陽の光がふりそそぎ、深く澄んだ溪流に、岩壁から白い滝が流れ込み、溪谷の紅葉が一段と鮮やかに見えた。

その後訪ねた京都の永観堂や南禅寺、神護寺や東福寺、曼殊院や詩仙堂、宮島の巖島神社や大分の耶馬溪でも、錦秋を「真紅」「黄色」「橙色」が彩っていた。

今年もいよいよ秋本番、色付く木立がどんな彩色を見せてくれるか楽しみだ。